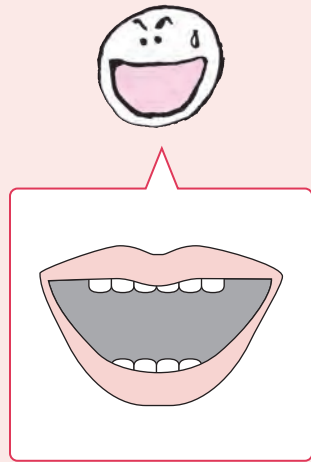


横に大きく開く

hat [æ]



単語

hat   lack   cat   bad   stamp  
 man   apple   lad (若者)   chap (男性)  
 flat (アパート)  

TRACK
1

例文

TRACK
2

1. Not *bad*.
2. My *cat* is getting too *fat*.
3. That *chap* looks *sad*.
4. Do you *happen* to *have* a *mac*?
5. *Pall Mall* is *parallel* to the *Mall*.

ポイント

UK 発音での、hat の母音は、かなり「ア」に近い音です。ここでは一応、[æ] と表記しましたが、最近では [a] と表記することすらあるのです。

出し方は、口を大きく開きます。そのとき、横に唇をひっぱることを意識してください。そして、ほんのちょっとだけ出だしに「エ」をつけて、力を入れて「ア」といいます。短く力強く発音すると、UK 英語らしさ(ちょっと日本語としておちつかないですが、本書ではこの表現を使います)が生まれます。

日本語の「ア」に近い [a] を使ってもかまいませんが、この場合、口の前のほうを意識して「ア」を出してください。[a] は [æ] より口を開いて出します。さらに口を大きく、最大限に開いて、喉の奥から出すと別の音 ([ɑ]) になってしまいます。

ただ、[æ] の後に有声子音(たとえば [b] [d] [g]) がきたとき、[æ] は長母音 ([i:] などの [:] がつくもの) のようにのびます。実は、うしろに有声子音がくると、どの母音ものびるのですが、特に [æ] では顕著です。

たとえば *back* は「ベァツッ」ですが、*bag* は「ベァーツッ」となるのです。

U K 発音 マメ知識

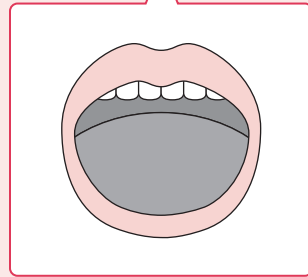
この母音は英米ともに、発音記号としては [æ] を使うのが普通です。そのため、まったく同じ音質だと思ってしまいがちです。しかし、アメリカ英語では、かなり口を閉じて発音します。つまり、かなり「エ」の成分が強いのです。また、長さも UK 発音よりはるかに長くなります。上で *back* は「ベァツッ」と書きましたが、アメリカ発音なら「ベァーツッ」です。アメリカ発音では、長く、大げさに発音されるため、[e:æ] というような二重母音になってしまうことすらあります。

【例文訳】

1. 悪くないですね。/2. 私の猫は太りすぎてきています。/3. あの男は悲しそうに見えます。/4. レインコートを持っていたりしませんか? /5. パルマル街はザ・マールと並行しています*。
 * the Mall はバッキンガム宮殿とトラファルガースクエアをつなぐ通り。パルマル街はその北側の通り。なお、Pall Mall は [pəlmé] とも発音されます。



can't
[ɑ:]

TRACK
9

単語

bath castle half fast

podcast rather …ここまで「ポイント」内(1)

can't chance example France

…ここまで「ポイント」内(2)

例文

TRACK
10

1. Aunt Marie makes me laugh.
2. After dance class, I take a bath.
3. I demand to know the answer.
4. Look at those plants of the castle.
5. He mastered how to pass the basketball.

ポイント

UK 発音で特徴的な母音のひとつが、Unit 4 でも扱った [ɑ:] です。喉の奥から出す「ォアー」といった感じの母音です。

UK 発音では [ɑ:] はアメリカ発音よりもはるかに多く使われます。代表的なのが can't です。アメリカ発音では [kænt] です。このように、UK 発音では [ɑ:] なのに、アメリカ発音では [æ] となる例は、実は can't 以外にもたくさんあります。これは英米の発音の大きな違いです。UK 発音らしさを出そうと思うなら、この can't タイプの単語を使いこなせないといけません。

この can't タイプの発音の単語は、主に以下の2種類です。

- (1) a + 摩擦音 [f] [θ] [s]: after, ask, basket, bath, class, last, pass, past, path, vast; laugh など
- (2) a + 鼻音 [m] [n] + 子音: dance, demand, plant, sample; aunt など

U K 発音 マメ知識

残念ながら上であげたふたつの規則は、絶対的なものではありません。例外もかなりあるのです。いくつかあげてみましょう。

- (1) 摩擦音 [f] [θ] [s] の前で [æ] のまま: mass (「かたまり」の意味のときに、「ミサ」の意味では [ɑ:]), math, passive (pass は [ɑ:]).
- (2) 鼻音 [m] [n] + 子音の前で [æ] のまま: ant (aunt は [ɑ:]), pant(s), camp.

例外が多い規則なので、単語を辞書で調べるときに、発音も念入りにチェックする以外にありません。

ところで、このような区別があるのは、RP と南部英語だけです。UK 北側(中部、北部、スコットランド)の英語、アメリカ英語、それに南部発音に似たオーストラリア訛りでもこれらは区別されず、同じ音で発音されます。

【例文訳】

1. マリーおばさんはおもしろいです。/2. ダンスのクラスのあとは、お風呂に入ります。/3. どうしても答えを教えてもらわなければなりません。/4. お城の植物を見てください。/5. 彼はバスケットボールのパスの仕方をマスターしました。

ジェスチャー

で発音してみよう③

「オ」「ウ」のグループ

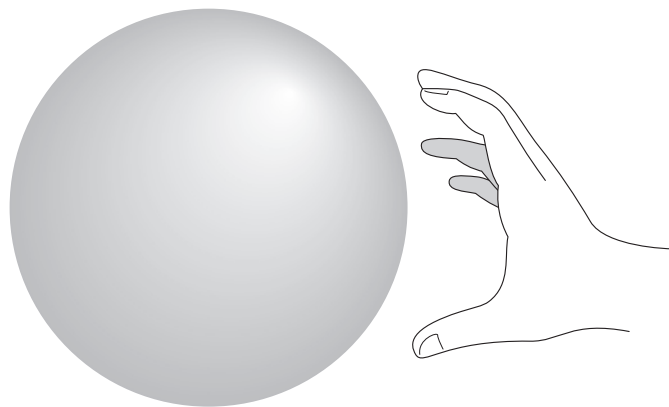
最後に「オ～ウ」のグループを見てみましょう。おや、見出しでは「オ」「ウ」となっているのに、なぜここでは「オ～ウ」と表記してあるのかな、と気づいた方はするどい！

実は、オとウは基本的には同系統の母音なのです。すべて唇を丸める母音で、口の丸め方(開け方)の大小で「オ～ウ」が決まるのです。

となれば、ジェスチャーも、手の開き方が重要なポイントとなります。

[ɔ:]

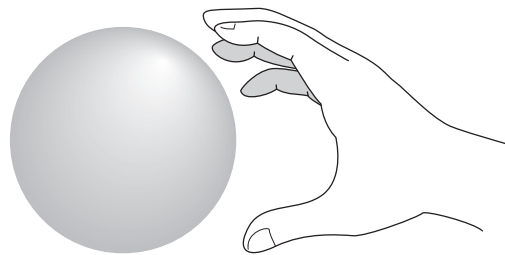
指を反らすほど開いた [ɑ:] (p. 15) よりも、ちょっとだけ指先をまげます。大きなボール(ドッジボールくらい)を片手でつかむような感じですが、



[ɔ:]

[o:]

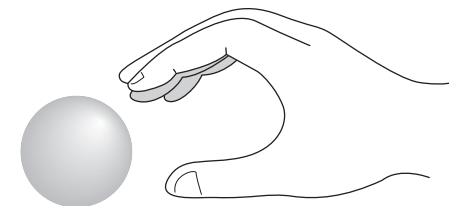
[ɔ:] よりも指をすぼめます。ソフボールをつかむくらいです。ゆっくり手を前に出しながら、発音してみましょう。



[o:]

[ɔ:]

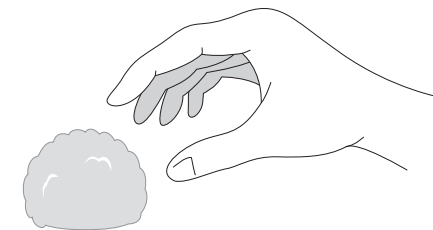
さらに指をすぼめます。今度はゴルフボールをつかみます。ピンポン玉も大きさはほぼ同じですが、ゴルフボールをイメージしてください。[ɔ:] は唇に緊張感をとめないます。それをイメージするには、重みとかたさがあるゴルフボールのほうがいいのです。



[ɔ:]

[ʊ]

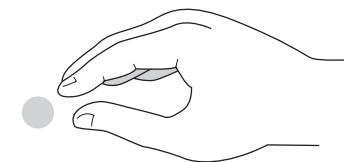
指先から力を抜いて、ひと口大のマシュマロやシュークリームを軽くつかむ感じです。[ʊ] は脱力した音で、あまり強い円唇化をとめないません。マシュマロなどのやわらかくて形が変わりやすいものをつかむイメージは、その脱力した感じを表すものです。



[ʊ]

[u:]

指先に力を入れて、すぼめます。5本の指をそろえてパチンコ玉をつまむ感じです。そのまま、ゆっくりと手を前に出します。

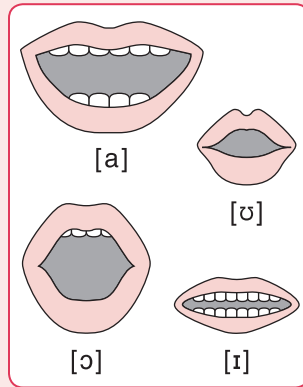


[u:]

UNIT
13

二重母音は意外に微妙

how [aʊ]
boy [ɔɪ]



ポイント

how の母音 [aʊ] を発音する際には、他の二重母音同様、前の要素 [a] を長く、うしろの要素 [ʊ] は短く、力を抜いて添えます。このバランスが英語らしさを生み出します。なお、[ʊ] は「ウ」というより、「オ」のつもりで出しましょう。

boy の母音 [ɔɪ] も同様です。前の要素 [ɔ] を長く、[ɪ] は短く発音しましょう。[ɔ] は口を大きく開いた「オ」でしたね。これに「エ」に近い、力を抜いた短い [ɪ] を添えます。

前項でも述べましたが、うしろに子音がくるか否か、その子音が有声か無声か、それによって二重母音の長さ(特に前の要素の長さ)は変わります。

- how, house (動詞 [háʊz]), house (名詞 [háʊs])
- boy, avoid, voice

の 2 組ではそれぞれ右に行くほど、[a] や [ɔ] が短くなります。

ちなみに、boy は発音記号では [bɔɪ] ですが、カタカナ英語では「ボーイ」ですね。これは、まさにこの性質が反映されたものなのです。きちんと前の要素 [ɔ] がのびた形です。最初に「ボーイ」と表記した人は、実際の音をよく聞いていたのでしょう。

U K 発音 マメ知識

[aʊ] は南部訛りだと、前の要素がかなり「エ」に近づき、[æʊ] となります。かなりつぶれたような響きの「エアオ」です。

一般的な [aʊ] であっても、[a] が口の前のほうで出す「ア」であるために、[k] と結びつくと「キャオ」と聞こえます。たとえば cow, count はそれぞれ「キャーオ」「キャオン」です。なお、このような発音はアメリカ英語でもかなり聞かれます。

[ɔɪ] は南部では、出だしの口の開きが小さくなって、[ɔɪ] となります。[eɪ] や [aɪ] 同様、出だしが微妙に違う音になるわけです (Unit 9, 12 参照)。ただ、この変化は比較的目立たないものです。

【例文訳】

1. すごく大きな音でした。/ 2. その家から変な音が聞こえてきます。/ 3. その男の子は茶色のズボンをはいています。/ 4. 大きな声で数えてください。/ 5. ロータリーではスピードを落としてください。

単語

[aʊ]: how - house (動詞) - house (名詞) town

roundabout (ロータリー)

[ɔɪ]: boy - avoid - voice noise oyster

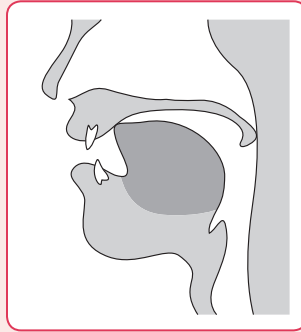
TRACK
25

例文

TRACK
26

1. That was a very loud sound.
2. There's a strange noise coming from the house.
3. The boy is wearing brown trousers.
4. Count out loud.
5. Slow down at roundabouts.

better
pit [t]

TRACK
37

単語

[母音 + t + 母音]: **better**  **letter** [tl]: **little**  **battle**  **shuttle** [nt]: **winter**  **twenty**  **interesting** [語末]: **pit**  **not** 

例文

TRACK
38

1. *Never better.*
2. Don't get hurt!
3. That's very interesting literature.
4. He looks a little over twenty.
5. Clear away the *cutlery*.

ポイント

[t]は、英語の子音でもっともよく使われる子音です。それだけに、語中と語末でも多く現れるわけですが、ここでの [t] の音形には若干の注意が必要です。

まず、語中の [t] です。アメリカ発音では、**better** が「ベダー」「ペラー」となるように、母音にはさまれると、[t] は有声化します。また、**twenty** が「トゥウェニ」となるように、母音+[nt]+母音の組み合わせで、[t] が消えてしまうこともあります(ダウンロード音声の **winter** では [t] が発音されています)。

ところが、UK 発音では [t] は [t] のままです。スペリングどおり、[t] をすなおに発音すればいいのです。ただし、UK 発音の [t] は前項でも述べたように、日本語より強く発音します。これを忘れないでください。

little, **battle** などの [tl] では、舌先を上歯茎につけたまま、いったん呼吸をため、一気に声を出します。息が強く響いた「トウ」のように聞こえます。

cut や **hot** などの語末の [t] は、改まったときには、最後まできちんと息を吐き出して、はっきり聞こえるようにします。ただ、日常的には、舌先を上歯茎にあてて息をためるところまでで終わりにすることが多いため、[t] はしばしば聞こえません(これは、専門的には「未開放破裂」といいます)。

UK 発音 マメ知識

UK 英語の [t] は強く響きます。ただ、最近の若い世代の発音傾向としては、普通の [t] でも、語中などの有声の [t] でもない、第3の [t] も使われます。それは舌先を使わず、かわりに喉の奥を絞めて息を止める音(声門閉鎖音) [ʔ] を使うというものです。いわば「ツ」のような、聞こえない音です。語頭では現れませんが、語中や語末では頻繁に現れます。**better** なら「ベッア」というぐあいになるのです。

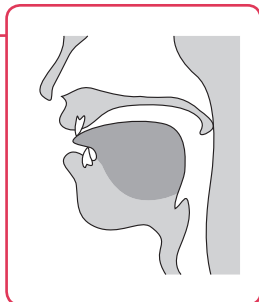
若いイギリス人の英語は、やたらと途切れる感じがすることがあります。それは、この [ʔ] のせいなのです。これは UK 全土で聞かれます。

【例文訳】

1. 最高です。/2. けがをしないでくださいね。/3. それは大変興味深い文献です。/4. 彼は20歳をちょっと過ぎたくらいに見える。/5. フォーク類を片づけてください。

UNIT
24

[θ][ð]



th の音には [θ] と [ð] があります。無声音が [θ] で、有声音が [ð] です。舌先を上前歯の先にあてて出す子音です。舌を前歯でかむようによく指導されますが、かむほど力はいりません。そっとふれるだけで大丈夫です。

私たちはこの音に「ス」や「ズ」をあててしまいがちですが、それよりも口の前のほうで出す「ツ」や「ヅ」と思うと感じが出ます。

TRACK
47

単語 [θ]: **thick, breath, faithful**

[ð]: **these, breathe, father**

例文 **Think more carefully about that.**

(もっとよく考えたほうがいいですよ。)

This is my mother.

(私の母です。)

You're through.

([電話が]つながっています。)

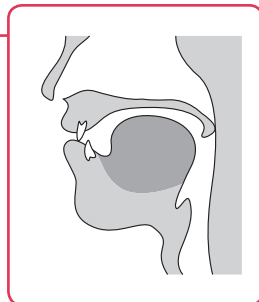
● UK 発音 🗺️ マメ知識 ●

日本人には「ス」や「ズ」に近いと感じられる [θ] と [ð] は、ネイティブには必ずしもそうは感じられません。ロンドン訛りでは、これに [f] や [v] を使います。サッカーのベッカム選手もこういった発音です。third は fird, mother は mover となるのです。

南アイルランドやアメリカの黒人英語などでは、[θ] [ð] に [t] や [d] があてられます。Thank you. は「タンキュー」と聞こえるのです。

UNIT
25

[f][v]



[f] [v] を出す際に、下唇を上歯でかむように指導されることがあります。でも、実際は、下唇で上前歯の先をさわるだけにしてください。ごく軽くふれるだけでいいのです。そして、ゆっくり息を吐きましょう。

[v] では声も出します。すると、下唇が細かく振動し、ムズムズ感じるはず。こうなるとかなり理想的な [v] が出ている状態です。

下唇をかむと力が入り、[f] [v] の特徴である、こすれる音が出にくくなってしまいます。力を抜き、ソフトに息を出すようところがけましょう。

TRACK
48

単語 [f]: **football** (サッカー), **foggy, fat**

[v]: **vest** (肌着), **Victoria, visit**

例文 **The elephant is eating fruit.**

(ゾウが果物を食べています。)

It's a very tough vote.

(それはとても難しい採決です。)

The knife is very heavy.

(そのナイフはとても重いです。)

● UK 発音 🗺️ マメ知識 ●

[f] のつづりは通常 f ですが、ギリシア語系の単語では ph です。photo [fəʊtəʊ], physics [fɪzɪks] (物理学), phonetics [fə'netɪks] (音声学) などがそうです。また、nephew (いとこ) の ph も [f] ですが、これはラテン語系です。ただ、UK 英語では [névju:] というぐあいに、この ph を [v] で発音することもあります。これは現在ではやや古い音形となりつつあります。



UNIT 37 英米で発音の異なる単語

TRACK
65~68



英米で発音の異なる語というのは意外に多いものです。しかし、日本では主にアメリカ英語が教えられているために、UK 式の発音がわからないことがままあるものです。ここではそのような単語を集めてみました。

* なお、ここで示した音形は絶対的なものではなく、これ以外の発音をする人もいます。

can't タイプ



		
ask	[æsk]	[ɑ:sk]
after	[æftə]	[ɑ:ftə]
bath	[bæθ]	[bɑ:θ]
class	[klæs]	[klɑ:s]
dance	[dæns]	[dɑ:ns]

worry タイプ


		
courage	[kə:riʤ]	[kʌriʤ]
hurry	[həri]	[hʌri]
curry	[kəri]	[kʌri]
flourish	[fləriʃ]	[flʌriʃ]
nourish	[nəriʃ]	[nʌriʃ]
thorough	[θə:rou]	[θʌrə]
borough	[bə:rou]	[bʌrə]

tube タイプ

* Unit 34 参照

		
tune	[tu:n]	[tʃu:n]
tube	[tu:b]	[tʃu:b]

その他

		
Oxford University*	[dj]	[ɔʤ]

* p. 98 参照

schedule	[skédʒu:l]	[fédʒu:l]
----------	------------	-----------

squirrel	[skwó:rɪ]	[skwí:rəl]
----------	-----------	------------

mobile	[móʊbl]	[méʊbaɪl]
--------	---------	-----------

fertile	[fé:rtɪl]	[fé:taɪl]
---------	-----------	-----------

missile	[mísl]	[mísail]
---------	--------	----------

fragile	[frædʒɪl]	[frædʒaɪl]
---------	-----------	------------

figure	[fígjə]	[fíge]
--------	---------	--------

tomato	[təmértəʊ]	[təmə:təʊ]
--------	------------	------------

mall	[má:l]	[mæɪl]
------	--------	--------

leisure	[lí:ʒə]	[lé:ʒə]
---------	---------	---------

either	[í:ðə]	[áɪðə]
--------	--------	--------

neither	[ní:ðə]	[náɪðə]
---------	---------	---------

ate	[ét]	[ét]
-----	------	------

garage	[gerá:ʒ]	[gæəriʤ]
--------	----------	----------

vase	[vé:ɪs]	[vá:z]
------	---------	--------

advertisement	[ædvərtáɪzmənt]	[ədvtáɪsmənt]
---------------	-----------------	---------------

vitamin	[vátəmin]	[vítəmin]
---------	-----------	-----------

often	[á:fn]*	[ɔftn]
-------	---------	--------

* ただし、アメリカ発音でも [t] はしばしば発音される。

issue*	[ífu:]	[íʃju:]
--------	--------	---------

appreciate*	[əprí:ʃiət]	[əprí:siət]
-------------	-------------	-------------

* issue, appreciate の赤字部分は、アメリカ発音では [ʃ] がほとんど。UK 発音でも [ʃ] が多いですが、[s] で発音することもあります。

UNIT
44イントネーションの
中心——トーンTRACK
82~83

UK 英語の特徴のひとつはイントネーションです。アメリカ英語とは異なるのです。UK 英語のイントネーションの特徴を説明する前に、まずはイントネーションの基本をおさえておきましょう。

イントネーションとは、ひとまとまりの発音単位(イントネーション句)にかぶさるメロディです。イントネーション句とは、単語や句、短い文など、ひとかたまりの意味を持つ単位です。

ひとつのイントネーションには、中心となる音程の変化(トーン)が必ずあります。代表的なトーンは、下降調・上昇調・降昇調(下降上昇調)です。学者によって分類はさまざまで、さらに細かく分けることもありますが、本書ではこの3種類に限定して扱います。

なお、トーンの現れる場所(音節)を「核」と呼びます。名前からもわかるように、イントネーションではこの部分がいちばん大事なのです。

核
Hugh is a lovely chap.
(下降調のトーン)
(訳: ヒューは感じのいい男だ。)

下で3種類のトーンを練習してみましょう。出し方のイメージは、下降調はカラスの「カー」です。上昇調はおどろいたときの「ええ~!」です。降昇調はなにかを聞いて不満気と言う「ええ、そ~お」の「そ~お」です。

下降調 ↓	上昇調 ↑	降昇調 ↘
No	No	No
Yes	Yes	Yes
Good	Good	Good
Lovely	Lovely	Lovely

UNIT
45

いちばん多い下降調

TRACK
84~85

次に、下降調を詳しく見てみます。これはいちばん多く使われるトーンです。約70%がこのトーンです。それだけに、きちんとマスターしたいトーンです。

ポイントは、日本語よりも高低差を大きくすることです。たとえば、日本語の「はい」は下降調ですが、高低差は小さい。でも、英語の Hi! は1オクターブくらいの高低差があります。だから、英語らしく発音するには、大げさに高低差をつけることが大切です。特にUK発音は高低差が激しいことが多いので、声域を広くすることをこころがけてください。

では、下降調の練習をしてみましょう。

Fine Return Tremendously	Cheers Brilliant	Single Appalling
--------------------------------	---------------------	---------------------

長い単語では、強勢のあるところで声をいったん上げ、その後一気に下げます。Tremendously のように強勢が単語の途中にある場合、強勢の前 (Tre-) は普通の高さです。強勢 (-men-) で一気に上がって下がり、それ以降 (-dously) は声を低く抑えます。

ところで、下降調にはどんな意味があるのでしょうか。それは、「断定・完結・新情報」などです。下降調が使われる部分は、話し手が聞き手に伝えたい情報であることを示しているのです。また、このイントネーション句で伝える情報はこれで完結、ということでもあります。

Thank you. Attention, please.	Thank you very much indeed. A return to Oxford, please.
----------------------------------	------------------------------------------------------------